横浜ナザレン教会復活後第一主日礼拝
「甦り、生きておられる主」
ルカ福音書 24:1-34, コリント信徒への手紙Ⅰ　15:12～22

【聖書箇所】

1 そして、週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った。 2 見ると、石が墓のわきに転がしてあり、 3 中に入っても、主イエスの
遺体が見当たらなかった。 4 そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人
の人がそばに現れた。 5 婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。
「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。 6 あの方は、ここにはおら
れない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったこ
とを思い出しなさい。7 人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、
三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」 8 そこで、婦
人たちはイエスの言葉を思い出した。 9 そして、墓から帰って、十一人とほか
の人皆に一部始終を知らせた。 10 それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコ
ブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人たちであった。婦人たちはこれらの
ことを使徒たちに話したが、 11 使徒たちは、この話がたわ言のように思われ
たので、婦人たちを信じなかった。 12 しかし、ペトロは立ち上がって墓へ走
り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかなかったので、この出来事に驚き
ながら家に帰った。

13 ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエ
マオという村へ向かって歩きながら、14 この一切の出来事について話し合って
いた。15 話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩
き始められた。16 しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなか
った。17 イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」
と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。18 その一人のクレオパという
人が答えた。「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったこと
を、あなただけはご存知なかったのですか。」19 イエスが、「どんなことですか」
と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と
民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。20 それなのに、わた
したちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけ
てしまったのです。21 わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださ
ると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日
目になります。

22 ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く
墓に行きましたが、23 遺体を見つけずに戻ってきました。そして、天使たちが
現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。 24 仲間のものが何
人か墓へ行ってみたのですが、婦人たちの言ったとおりで、あの方は見当たり
ませんでした。」25 そこで、イエスは言われた。「ああ、物分りが悪く、心が鈍
く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、26 メシアはこういう

苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」27 そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、ご自分について書かれていることを説明された。28 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ移行とされる様子だった。29 二人が、「一緒にお泊りください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。
30 一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。31 すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。32 二人は、「道で話しているとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。33 そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ると、十一人とその仲間が集まって、34 本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

コリント信徒への手紙Ⅰ　15:12～22

12 キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。 13 死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです。 14 そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。 15 更に、わたしたちは神の偽証人とさえ見なされます。なぜなら、もし、本当に死者が復活しないなら、復活しなかったはずのキリストを神が復活させたと言って、神に反して証しをしたことになるからです。16 死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかったはずです。17 そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります。 18 そうだとすると、キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまったわけです。 19 この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です。 20 しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました。 21 死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。 22 つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。

1　復活節

今、教会は主イエスの復活を記念する季節―復活節を迎えています。今日はその二週目の日曜日。ルカによる福音書とコリント信徒への手紙Ⅰから、主イエスは甦られた！という、２０００年前の力強い証言の声に心と目と耳を集めていきたいと思います。

2　聖書のメッセージ

私は、毎週のように、この説教壇の上から、人の罪について、イエスの十字架について取り次がせて頂いています。人の罪―私達は自分に不都合な人を「あいつなんていなくなってしまえばいい」と憎む存在。私達一人一人をかけがえのない存在として創られた父なる神を神とせず、あわよくば、自分や他の人間を神として、自分の思うように動かしたい…と願い、神と敵対する存在。

一方、神という方は、全く正しい方。間違う事は許されない、罪を犯すものを裁かなくてはならない。自分達を神とする人間、神に敵対する人間は神に裁かれて滅ぼされるしかない。

だけど、神は敵となってしまった人間を愛される。敵であるにも拘らず私達一人一人を唯一無二の尊い存在と受け止めてくださる。「人間を滅ぼしたくはない！」神はその腸がよじれるほどに苦しまれた。滅びるしかない人間の痛みと悲しみをご自分の痛み・悲しみとされた。

遂に神が生んだ独り子、神の御子を私達人間と全く同じ一人の人―ナザレ人イエスとして地上に送られ、私達すべての人間の罪を負わせ十字架にかけた。イエスは、私達すべての罪を神に償うため、十字架の上にその身を裂いて亡くなられた。最も屈辱的で孤独で苦しみの極み―死の中の死、滅びの中の滅びを引き受けられた。それ故に、私達人間が神に背き続けた罪が赦され、私達は罪の縄目から解き放たれ、父なる神のみ前を、神の子として生きる命、滅びることのない永遠の命が与えられた。さきほどご一緒に告白した使徒信条の内容であり、私が毎週皆さんにお伝えしている聖書のメッセージです。

3　イースター音楽会

今日は午後から、イースター音楽会で神を賛美します。その中で音井兄の友人の柳楽さんがマタイ受難曲の中の独唱曲「涼しい夕暮れに」を歌われます。その歌詞が素晴らしいので少し早くご紹介したいと思います。

夕暮れの涼しいときに、アダムの罪は明らかになった。夕暮れに、救い主はそれを克服された。

夕暮れに、鳩が再びやって来た、そしてオリーブの葉を一枚、口にくわえていた。おお、美しい時よ!おお、夕暮れの一時！

平和の約束が今、神となされた。イエスが十字架を全うされたから。彼の亡骸は、安らぎに向かう。ああ、愛する魂よ、願うがよい。行って、イエスの亡骸をもらい受けるがよい。おお、私たちに救いをもたらされた、尊い形見よ！

主イエスの十字架上での戦いは終わった、アダム以来連綿と人間は神に背いてきたが、その背きはぬぐい去られ、神と人との間に平和がやってきた、やっとやっと平和がきた…春の夕暮れの中、葬られるイエスの亡骸を通じて成し遂

げられた和解の意味をバスの歌声とオルガンの通重低音により厳かに歌い上げられます。

4　十字架の意味

しかし、主イエスの亡骸から、神と人との間に平和がやってきた…というのは、十字架だけでわかったわけではありません。主イエスが復活されなければ、甦られなければ、主イエスの弟子達は、そのことに気付かなかった筈です。弟子達が気づかなければ、私達にも伝えられない。私達は相変わらず神と敵対し、自分自身と親しい人を信じてやっていくしかないのです。全てが自分にかかっている…という不自由で重苦しい命、やがては死を迎え滅び去る命を生きることになります。

パウロがコリント第一の手紙１５：16-17で次のように言っているとおりです。**「16 死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかったはずです。 17 そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります。」**

パウロというのは、古代最大の伝道者。あちこちに教会を立てた人。コリント教会もパウロが立てた教会の一つです。しかし、コリント教会は問題の多い教会でした。差別意識が強く、富める者が貧しい者を見下し、知識階級が、そうでない人びとを蔑ろにしていた。教会とは言えないような内情があったようです。そんなコリント教会には、「死者が復活することなどありえない」と言いい、主イエスの復活を否定する人もいたようです。

パウロはそんなコリント教会の信徒達に対して手紙を送り、主イエスが確かに復活されたことを語っているのが第一コリントの１５章です。今日は時間の関係で１５：１２～２２までをお読みしました。ここでパウロはイエスの復活の意味を語っています。パウロは、「主イエスが甦られたからこそ、そして今も生きて私達の間で働いておられるからこそ、私達は罪の縄目から解放され、救われているのだ」と言っています。十字架に確かな意味を持たせた、つまり、ナザレ人イエスが我々のキリスト、救い主であるとわかったのは、十字架の死から主が甦られたからです。夕暮れ時にイエスの亡骸を納められた墓。しかし、その墓はからとなっていたからこそ、「涼しい夕暮れに」の歌が歌われました。

5　身体に対するこだわり

その復活を描く場面をルカ福音書から見ていきたいと思います。主イエスのご遺体を墓におさめた三日後、日曜日の朝のことです。甦りの最初の証人は女性たちでした。彼女達はガリラヤからイエスに従い、食事や身の回りのお世話をしてきたようです。

私達人間は愛する人の身体をとても大切に思います。私の母がたの祖母の話をしたいと思います。祖母は、終戦直後の食料事情の悪かった時、三歳の息子を栄養失調で失いました。母が涙ながらに話していたのは、母にとっては８歳下の弟の野辺の送りの時の祖母の姿でした。祖母は三歳の息子の遺体を抱きしめ、「この子を柩に入れるならば、私も一緒に柩にいれてくれ」と我が子の身体を離そうとしなかった…というのです。遺体、亡くなった人の身体はその人そのもの。死体以上の意味をもちます。それは、私も父と母が亡くなった時、体験しました。父の遺体も母の遺体も怖いとは思えませんでした。衰え果てた父や母の身体でしたが、私を養い育ててくれた人そのもの、寧ろ慕わしいものに思えました。この気持ちは、ここに集われる皆さんもそうだと思います。

日曜日の朝早くイエスの収められている墓に向かった女性たちも私達と全く同じ気持ちだったのではないでしょうか。非業の死を遂げた愛する先生を慕い、彼を血みどろのまま、血の匂いをまとわせたまま、陰府に送ることが耐え難かったのです。主イエスの遺体を綺麗にするために墓地へと向かいました。

6　復活最初の証人が女性

そんな彼女達が最初の復活の証人となるのです。女性たちが最初の証人というのは意味深いことです。２０００年前の古代世界では、女性は一人前の人間として扱われていないからです。だから彼女達が「イエスが復活された」という天使の言葉を男性の弟子達に告げても信用しなかったのです。「これだから女は困ったものだ。悲しみのあまり妄想をみたんだろう。」と考えたのかもしれません。

復活の場面を読むと、キリスト・イエスが人としてマリアから生まれ、飼い葉桶に寝かされていた、その最初の証人が羊飼いであることを思い出します。当時の羊飼いは、社会の最下層、人とも思われていませんでした。「羊飼い」という言葉は、「嘘つき」の代名詞でもあったそうです。

キリスト・イエスの誕生と復活は、神の力が私達人間の歴史に力強く介入しておこった出来事です。その出来事の最初の証人が、社会で重いられている金持ちや支配者や知識人ではなく、一人前の人間扱いされていなかった羊飼いと女性であったことは、不思議です。

神が、社会で人間に信用されている人びとではなくて、一人前に扱われていなかった人たちを最初の証人にお選びになったのは、私たち人間に対する神の痛烈な一撃のように思えます。神はまず女性たちに甦りの事実を明らかにお示しになることによって、当時の世の中でふんぞり返っていた男性に対して挑戦しておられるようです。女性やこども、弱い者・小さい者を差別し、権力者、知識人、金持ち達だけの力と富と知恵で世界は動かせる…そういう人間の傲慢を神は打ち砕こうとされています。

自分たちだけで世界を作っていると思い込んでいる人びとの足元を揺るがすような事件として主イエスは甦られた…ともいえます。実際、人間が自分たち

を生かしている真理だと思い込んでいるものとは別の、まことの真理を明らかにするためにイエスは甦られました。主イエスの復活は、私達がこれこそ絶対である、と思っているものを揺るがす出来事であった…女性たちが復活の最初の証人であるということは、復活の出来事の意味を伝えています。

自分達を絶対化する人びとに退けられる立場の人間に、甦りのイエスの命がまず示されました。天使たちはまず女性たちに語るのです。「**なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。 6あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。 7人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。**」

7　思い出す

この天使の言葉には、私達人間が主イエスの復活を信じる、つまり、主イエスを救い主として信じるうえで大切なことが言われています。それが主イエスの言葉を思い出す…ということです。

「昔を思い出すことになんの力があるのか」と思うかもしれません。しかし、なかには、過去の記憶が人を窮地から救うという事は多いのではないでしょうか。過去、非常に困っている時、あの人に救われた、この言葉に支えられた…そういう記憶のある人も多いと思います。過去が現在に甦り、力を得るのです。

主イエスの言葉と行いを思い出す事は、過去を現在へと蘇らせることなのです。それもただ単に人間の行動、人間の言葉を蘇らせることではありません。十字架の主イエス。神の御子の言葉と行いを、今、生きる自分の中に再び響かせるということなのです。そうして私達は、遠い古代世界に生きたナザレ村出身のイエスという人が現代を生きる私の罪のゆえに十字架の死を、死の中の死を死んでくださり、三日後に甦らされ、私を罪と死から解放してくださる、新しい命をくださった…と信じることができます。だからこそ教会は繰り返し、この２０００年前のことを語り続けています。主イエスの仰った言葉を自分もそこにいたつもりで聴く、この自分に仰られた言葉として受け止める、イエスがなさった聖餐を私達もそこにいたかのように追体験する、そのことによって、今、生きるこの自分に力強く働きかけることを知るのです。その最初がエマオの道への物語です。

8　エマオへの道

春の午後の美しい物語。そよぐ風、晴れた空、のどかな風景。しかし、二人の弟子は暗い顔をしています。自分達のリーダーであり先生でもあったイエスがローマ軍に反乱を起こした罪で処刑された…だけではありません。彼らは「主イエスは甦られた、生きておられる」と既に告げられています。仲間の女性た

ちが朝早くもたらしたニュースを彼らは耳にしています。しかし、彼らはそれを信じられないのです。彼らはこれらの出来事、ここ三日でおこった過去をどう考えてよいかわかりません。だから、この先どうなるかも分からないのです。彼らを支配しているのは、大きな不安です。自然と顔は暗くなります。

そんな時、主イエスが近づいてこられ、共に歩き始められた…とルカは語ります。喜びと確信に満ちた弟子達に主イエスが近づかれたわけではないのです。不安に支配されてエルサレムから逃げ出した弟子達を、甦られた主はエルサレムから追いかけられた、そして近づかれました。このことは私達に深い慰めを与えてくれます。

しかし、二人の弟子には主イエスだとわからりません。「目が遮られていたから」とあります。彼らは自分たちの心を不安でいっぱいにしています。だから、親しく教え導いてくれていた主イエスさえも判りませんでした。主イエスのことを心から追い出し、思い出していなかったのです。

9　叱る主

そんな弟子達を主は叱られます。**「ああ、物分りが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、26 メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」**私達の聖書は上品に訳しています。**“物分りが悪く”**の原語は、「この馬鹿者達」英語だと「How foolish!」とも訳せる言葉です。主イエスは二人の弟子達を叱り飛ばしています。

しかし、叱ることと自分の怒りをぶっつけるのとは違います。相手を大切に思っていなければ叱れないのです。世のひねくれ夜の街にたむろする若者達を見守り導いてきた「夜回り先生」と呼ばれている人がいます。彼が子供達を叱る時は、相手の身体を抱きしめているつもりで叱るそうです。子どもを大切に思っている、愛している…そのことを忘れずに叱る為とのことです。

皆さんはどうでしょうか、実は、自分を大切に想っている人から叱られた事は、とても大切な記憶として残り、その人を作り上げているのではないでしょうか。そう、ある歌から再び思わされました。午後の音楽会で和田さんが歌ってくださる武満徹の「小さな空」という歌を歌、こどもの頃、叱られたことを思い出す歌です。歌詞を紹介したいと思います。

「１青空みたら　綿のような雲が　悲しみをのせて　飛んでいった。いたずらが過ぎて　叱られて泣いた　こどもの頃を　憶いだした。

２夕空みたら　教会の窓の　ステンドグラスが　真赤に燃えてた。いたずらが過ぎて　叱られて泣いた　こどもの頃を　憶いだした

３　夜空をみたら　小さな星が　涙のように　光っていた。　いたずらが過ぎて　叱られて泣いた　こどもの頃を　憶いだした」自分を叱ってくれた周りの大人の愛が、穏やかな風景のように自分を包んでくれていた、そんなこどもの頃を懐かしく歌っています。

しかし親の愛に包まれて生きられるのは子どもの頃だけ。大人になれば自分で生きていかねばなりません。人間の愛には時間的な限界があります。しかし、神には限界はありません。このエマオでの弟子達も、はっきりと叱ってくださる主イエスの眼差しのうちにいました。そして私達も主イエス・キリストを思い出す時、その事に何度も繰り返し繰り返し気づかされます。

10 聖書の御言葉によって

どのようにして気づかされるのでしょうか。ルカは、エマオへの道で、主イエスは弟子達に聖書の言葉を説明した…と語ります。「**モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、ご自分について書かれていることを説明された。**」とあるとおりです。

私達も、毎週の礼拝の度に聖書の言葉を聴きます。説教によって御言葉の取次を受け、聖書の言葉を歌詞とした讃美歌を歌います。遠い昔に語られた言葉、書かれた言葉が、今、私達に語られた言葉として語られ、歌われます。そうすることによって、私達は、甦って生きておられる主イエスが私達に語られた言葉として聴くのです。

さきほどの主イエスが弟子達を叱られる言葉「ああ、物分りが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち」というのもそうです。まさに自分に向けて主が叱っておられる言葉として聴きます。心あたりはいっぱいあります。

そして、この厳しい言葉の中に、私を作り上げる神の愛を見出すのです。まさに私達もまた、私達を抱き寄せるようにして叱ってくださる神の愛のうちに生きている、いや生かされているのだ！と気付かされます。このエマオでの弟子達のように、はっきりと叱ってくださる主イエスの眼差しのうちに私達もいるのだと気付かされます。私達が聖書を通じて主イエス・キリストを思い起こす時、その事に繰り返し繰り返し気づかされるのです。

11 聖餐で

そして夕方になり、泊まるために入った家の夕食の席。主イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて弟子達に渡された。この時、二人の目は開けた…と聖書は伝えます。主イエスが逮捕される晩の最後の晩餐の席で、「このようにして私を記念しなさい」とパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いた事を思い出したのです。今で言えば聖餐式である。

さきほど、女性たちは主イエスの身体をとても大切に思ったとお話ししました。身体は主イエスの存在そのもの、実在そのもの。だから、その主イエスの身体をパンと葡萄酒にたとえた聖餐にあずかるとは、主がその存在そのものを裂いて私達に差し出すほどに愛してくださった、いや愛してくださっている十

字架と復活の愛を思い起こす事です。それが聖餐式です。このエマオへの弟子達と同じであります。

そのようにして私達は、２０００年前十字架にかかって死んだナザレ人イエスが、私の救い主である…キリスト・イエスであると知り、そのキリスト・イエスは今も生きて私達を導いてくださると知る事ができます。

即ち礼拝を通してイエスを思い起こし、キリスト・イエスである事を知るのです。礼拝で語られる聖書の言葉、説教、賛美の中に、聖餐式の中に、今も生きているキリスト・イエスを見出すのであります。

12 燃やされた弟子達

キリスト・イエスを知ることこそ、私達に全く新しい力を与えます。それが３２―３２節である。**“32 二人は、「道で話しているとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。33 そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻った”**

この「時を移さず出発して」と翻訳されている部分ですが、原語のギリシャ語を直訳すると、「すぐに立ち上がらされて」です。この「立ち上がらせる」という単語。「主イエスが復活させられた」という「復活させる」と全く同じ単語。キリスト・イエスの復活の命が弟子達にも与えられた、甦りの命が弟子達に与えられたことがわかります。だから、不安でいっぱいに、まるで死んだような気持ちで暗い顔をしていた二人の弟子達は、今、喜びに満ちて立ち上がり、力強い足取りで歩き始めました。

13 礼拝

これはまさに現代のキリスト者も同じです。今日は様々なところから、色々な方が礼拝にこられました。喜び勇んで来た方もいらっしゃるでしょう。しかし、日々の闘いに疲れ果て、疑いや不安を抱いて重い足取りで来られた方もいると思います。

私もかつて信徒として教会の礼拝に参加していた時、日々の生活でとても難しいことがあったりすると、礼拝にいく事さえ億劫になることが再々でした。重い足取りで礼拝に向かう。時には行こうか行くまいか散々迷ってかなり遅れて礼拝に出たことも何度かあります。

しかし、礼拝で説教から祈りから賛美から、主イエス・キリストの十字架と復活に心を向けさせられ、思い出させてもらう。それによって不思議に力を与えられて、教会をあとにしていた事が思い出されます。今から考えると、私は、礼拝することによって、まず主イエスの十字架と復活を思い起こし、人の罪と神の愛に気づかされる事で、生きて私に語りかけるキリストと出会い、新しい命を頂いていました。今も頂いています。それは魔術的なことでも迷信でもな

んでもなく、実際にこの現代世界で毎週日曜日礼拝が捧げられている場所で起こっていることであります。

　このエマオの途上にあった弟子達と同じように、毎週日曜日、私達は甦りの主と出会います。だから、私達の教会の掲げる十字架に、主イエスのお姿はありません。主イエスは生きておられ、キリスト、救い主として私達の間に今働いておられるのです。古い自分の命、罪を犯さざるをえない、人を憎まざるを得ない、滅びざるを得ない古い命ではなくて、キリスト・イエスの甦りを知る事によって与えられる新しい命に生きるようにと私達を今ここで招いています。神を感謝し、賛美します。